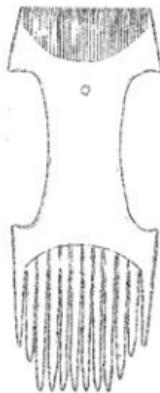


# 平城宮第37.39.40.41次発掘調査概報

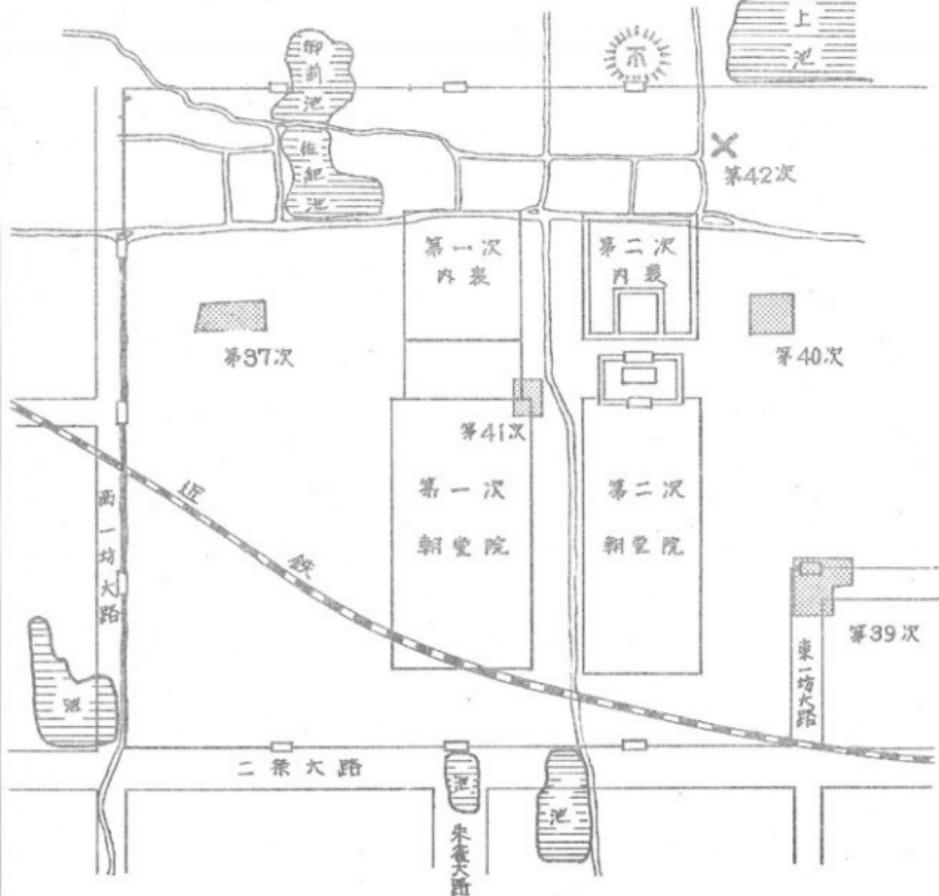


昭和42年10月

奈良国立文化財研究所

# 平城宮略図

N



表紙カット

第41次調査出土 木櫛

## 平城宮第37-39-40-41次発掘調査概要

奈良國立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が平城宮跡において継続的に行っている調査のうち、昭和タヌ年度の当初より10月までの間に終了した5回の発掘調査について概要を報告する。

調査の回次と対象とした地域を列挙すると、第37次調査は宮跡の西部、第39次調査は從来東面南門と推定していた地域、第40次調査は第2次内裏外郭の東方、第41次調査は第1次朝堂院東部、第42次調査は第2次内裏外郭東北隅付近である。以下にそれぞれの概要を述べるが、第42次調査のみは、宅地現状変更にともなう小規模な調査であり、若干の sondage と柱穴を検出したほか、言うべき成果を持たないので記述を省略する。

各次別の調査地区名・面積・期間は次表のとおりである。

調査回数	発掘地区	面積	発 挖 期 間
37次	6ACP-C,F	メタa	昭和タヌ年2月6日 — 昭和タヌ年5月27日
39次	6ALS-C,F,I J,G	43.2a	昭和タヌ年12月8日 — 昭和タヌ年5月26日
	6ALT-T,R		
40次	6AAP-B	36.8a	昭和タヌ年4月27日 — 昭和タヌ年10月3日
41次	6ABE-L,M,P	40a	昭和タヌ年5月2日
	6ABR-Q		
	6ABB-A		
42次	6AAA-丁	6.93a	昭和タヌ年9月6日 — 昭和タヌ年9月13日

### I 第37次調査

調査地域は、五重池南方にある小字「北庭内」に属する約タヌアールで、推定第一大内裏と西一坊大路のほぼ中間にある。

検出した主な遺構は、建物3棟、櫛3箇、溝2箇、井戸1、橋1、礎

敷 / などである。

数条の橋と溝は発掘地域の南を東西に走り、この地域の南を限る性格をもつ遺構とみられる。孤立柱からなる橋は北から SA5270, SA5360, SA5360 の 3 条がある。SA5270 は柱間 2.94m 等間で、東西ともに調査地域の外におよぶ。SA5360 は柱間、方向ともに不統一で、東は調査地域外にのびるが、西は新らしい土塹で壊されていて不明である。南端にある SA5360 は柱間 2.27m 等間で、東は調査地域の外におよび、西は調査地域の西端近くで終わっている。

溝又茶は、素樋の溝で、その内端は調査地域の外にのびている。北の SD5280 は、幅は当初約 6.5m であったが、後に北寄りに幅 2.6m の狭い溝になる。3 間の橋 SX5330 は狭い溝にかけられたものである。SD5280 は幅約 5.0m、橋 SA5270 の南 2.5m にあり、橋にともなう溝と考えられる。

建物その他の遺構はこれらの橋や溝の北にあつた。遺物 3 個はいずれも調査地域の東半にある。東の SB5300 は、南北棟 10 間以上 × 4 間の東西廂付基壇石建物（桁行柱間 4.15m、梁行柱間 3m）である。基壇はすでに削平をうけてわずかにその痕跡をとどめているだけで、この基壇土上から柱列位置を幅約 1~1.5m、現状で深さ約 20cm 前後を掘りとつて布掘地窓としていた。礫石はすべて失われ、根石がこの布掘地窓上に残存していた。西側柱列の 3 間西に幅約 2.0m の素樋の雨落溝が残っていた。SB5310 は、SB5300 の西にあつて東西棟 8 間 × 3 間の南北廂付掘立柱建物（桁行柱間 2.75m、梁行柱間 2.5m）で、北側の柱列と南入側柱列は東へ 1 間ずつ延びている。この建物の方位は、他の遺構とちがつて東で北側にわずかにふれている。SB5280 は SB5310 の南にある東西棟 4 間 × 2 間の掘立柱建物（桁行柱間 2.2m、梁行柱間 2m）で中央に間仕切りがある。極りかたは小さく、不揃いである。

井戸 SE5320 は 1 辺 1.4m の方形で、四隅にたてて支柱に上下 2 段の甌をわたりし、外側から甌盤を祠堂ねにならべたもので、遺構検査坑から下の底には径約 60cm の曲物をいげ込んでいる。

調査地域西端近く、溝 SD5280 の北側に幅約 2.6m の散敷 5330 が南北方

所にあつた。

以上述べた如きは空説せず、その年代決定は困難である。ただSB5300の表盤周辺とSD5280からは、幡原宮所用瓦と同範の軒平瓦664型式および墳帽寺式と通称される6301型式と6671型式の組合せの出土が顯著であり、おそらくこの建物と溝の遺構は平城宮創設当初にさかのぼると推定する。橋SA5270はSB5300の平行柱間と等しく、柱通りが揃っているから、これと平行するス茶の溝とともにSB5300と同一時期の遺構とみられる。井戸は出土土器からすれば奈良時代末か平安時代初期の可能性が大きい。その他の遺構の時期は推定できない。

今回の調査地域は第2次内裏周辺部と較べて遺構の数が少なく、重複していないことが特徴である。この地域は南は東門に走る溝、溝などで区画されているが、この区画は東西約100mで実施した第28次調査地域では検出していない。平行40m以上という室内でも特に長大な建物のあるこの地域がどのような性格のものかは今後の周辺地域の調査によつて明らかにされよう。

## II 第39次調査

第39次の発掘調査は、東面南門推定地の東側でおこなつた。

この地域は辰巳、宮城東面の大垣に沿つた東一坊大路と、東面南門からまっすぐ延びる一・二条間の条間大路とが「丁」字形に交差する地點と推定していた区域である。ところが調査の結果は辰巳の推定に反して、東一坊大路は東面南門の推定地で条間大路と「L」字型に接続し、東一坊大路の突きあたりには南面する門が造られており、第29次調査で検出した東面大垣の途切れる地點から宮城が東方に張り出すことが判明した。

検出したおもな遺構は、基壇建物1棟、獨立柱述物10棟、橋3列、築地3条、溝/ス茶などである。

### ○ 道路と溝

調査地盤の西部を北から南に向つて流れる溝 SD495(付図参照)、以下

同じのは、第32次調査で検出した名城東外濠の延長で、場内けれどある。この靠のI・丁地区にかかる部分は後に廻めたて、かわりに溝SD4951を設けて水道を西に迂回させている。しかし、この迂回溝はその角度が急なためか、まもなくゆるやかなSD5030に改修し、SB5000の南約4mの地点でもとのSD4951に合流するようしている。このSD5030は、発掘区北端から約20mの間では溝底に径20~30cm大の自然石を散きつめている。これらの溝が分かれる部分では、時期を異にする6条もの溝が複雑に重なりあい、何度もの改修がおこなわれていることがわかる。溝SD5030は中村25mの狭いもので第32次調査で検出した東一坊大路の東側溝に接続する。この溝と柵SA5010の延長の交点には瓦を使用した暗渠がある。溝SD4951とSD5030にはさまれた中約20mの空間は東一坊大路の路面である。ただし丁地区の北半にはのちに述べる門SB5000があるので、東一坊大路はここで行き止まりになっていたと考えられる。

R地区北寄りの溝SD5774とD・G地区南寄りの溝SD5200は、いずれも溝SD5030の東約3mのところからはじまる東西溝である。このスラブの溝にはさまれる幅約16mの空間には、とりにてていうべき遺構がないので、一・二条間の茶間大路の路面を考える。SD5774の両側の幅約05mの東西溝SD5170は築地SA5128の東側に沿って南に曲がり、丁地区を横断する木製暗渠SD4990で溝SD4951と通じている。

#### ○築地と柵

R地区のSA5128とSA5123はいずれも地山面を高く残しており、築地痕跡と考えられる。中は内側とも約3mである。C地区南端の築地SA5055は版塀がよく残っている。この北側の溝は、この築地の北側の雨落溝と考えられるが、倒と底に玉石を用いている。D地区からE地区にかけて柵SA5010があるが、これは溝SD5030の東側からはじまっている。これらの築地・柵をすっすぐ西に延長すると、第29次調査で検出した東西大運SA4340の終る地点に達する。

#### ○門

丁地区からE地区にかけての遺物跡(SB5000)は後世の水流によつて

大きく破壊されているが、東部（G地区）に基盤の積土と礎石の残った礎石据えつけ穴があり、西には転倒している礎石を又個検出した。東部で検出した積土は、東一坊大路の東端に位置する所以西側ではすでに削りとられているが、東一坊大路の道巾いっぱいに整られた基壇建物とおもやす。すると、構SA5010はこの建物の東側にとりついていたわけである。なお、I地区の東南隅には板灰岩が東西方向に並んだ痕跡を検出した。これをこの建物の北の端と考えると、基壇の規模は20m×15mほどとなる。

この建物は、その位置からみて、東一坊大路の突きあたりに南面して透つ5間×3間ほどの門と考えられる。この建物跡の南側に掘られている土塀550/04から、多量の埃皮のくずや、手斧などで削ったと考えられる建築用材のくすとともに「作門所」の文字が記された木簡が出土したことは、この推定を裏書きするものといえよう。

この門SB5000の存在と構SD5/00・5050が西に迂回することは無關係ではないと思われる。構SD4951がまっすぐ南方に向っていた時期にはまだこの門はなく、門の築造にともなって構SD5/00を設けて西に迂回させたものか、あるいは構SD4951と併存していたが基壇建物という性格から、のちに構5/00・5050として西に迂回させたものであろう。いずれにしても、この問題をつきつめて考えるために、構SD5/00のつくられた時期が重要な意味をもつ。その時期を正確に限定することはできないが、I地区から丁地区にかけての層で出土した木簡の年號は、構SD4951では養老、神龜などであり、構SD5/00では神龜、天平勝宝、天平宝字などがあるところからみて、構SD5/00の上限を神龜年間にあさえることも可能であろう。

#### ○他の建物

建物跡は、F地区において検出した2間×3間の倉庫ふうの建物SB5050がある。R地区では4間×2間東西棟(SB5/09)、5間以上×2間(SB5/08)・2間以上×3間東廂つきのもの(SB5/51)いづれも南北棟の建物2棟、4間以上×3間以上北西廂つき、棟方向不明のもの(SB5/50)

会計4棟が発見されている。このほか、南面堀北側で小規模な遺物群を数件検出した。

さて、以上のことから第39次の調査地域は、東一坊大路が東へのびる堀間大路と「レ」字形に接続して終末点になる個所であるといえる。東一坊大路は築地の心心距離が約1/2丈（約35m）あり、堀は第14次、第39次の調査で確認したものと同様約10mの幅をもつ。堀間大路も築地の心心距離は約1/2丈ほどであり、溝SD5200の北側は約10mの空間をもつものでやはり堀地と考えられる。

これらのことから、従来方八町と信じられていた平城宮の複数は、東面南門推定地であったこの地域から東へ張り出していたことが認められるのである。また築地SA5122・5123は左京二条二坊三坪の西北の隅である。

出土遺物は、瓦・土器が主要なものであるが、木簡もおよそ250点出土している。出土木簡のうち主なものは次の通りである。

(1) 「...便從小子門出入之」

(2) 「...正六位上行大尉松連松主」

(3) 「常陸國那須郡日御郷戸主物ア大山戸口日下部奈万呂巻」

(4) 「鉢六百文 天平寶字四年正月廿日」

(5) 「若狭國遠敷郡木津郷小海里

(6) 「神龜五年九月十五日」

(7) 「幣指牒 作門所 庭<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>右充彼前」

(8) 「少舞粉達 「鈴末呂」八月廿八日付委文末呂」

### III 第40次調査

調査地域は第2次内裏外郭の東方、第38次調査地域の南に接する36.8アールの範囲である。

宮がつくられる以前、この地域は東南に向うゆるやかな傾斜地であつたが、宮の整営にともない、地盤の降ろ東南部に、又間にわたって盛土による整地を行っている。整備された造営は、第1回の整地面にあるもの（A期）、第2回の整地面にあって重複關係から年代のさかのぼると考えられるもの（B期）、おなじく第2回整地面にあるが年代の降るもの（C期）の3時期に大別することができる。つぎに各時期の造営の概略を述べ、この地域における造営の消長をたどることにする。

A期 第1回の整地面に造営を行った時期である。この際の整地は不完全なもので、地表にはなぶ、ゆるやかな傾斜が残っていた。発掘区の西端では、のちの樂地SA2746の下層から南北柵列SA2940が検出され、またそれにとりつく東西柵列SA4826も第38次調査で見出されているが、この地域全体がどのように用いこまれていたかは明確でない。この時期の建物はすべて柱立柱建物である。今回の調査で検出した3棟のうち2棟は東西棟で、発掘区の中央北端に柱通りをそろえて南北に相対する。規模から見て、北の2間×4間南北扇建物SB5400（桁行スケル、梁間スケル）がこの地域の主屋であり、南の2間×2間の建物SB5400が付属棟であると見なされる。残る1棟は上記2棟の東南にある東西棟13間以上×2間の建物SB5350である。この建物は梁間3ヶ所、桁行柱間は不揃いで、北より2間目と10間目が39m、その他は29mとなっている。

上記した3棟の建物は、第38次調査で見出した柱立柱建物SB4860、SB4870と同一整地面上にあり、同時期の造営を見てよい。

B期 第2回の整地面に博穀基廃建物が建ちそろい、この地域が最も整備された時期である。この際の整地によって地表は、はじめて水平に整えられ、その結果として、南方の地盤の低い地域（未発掘）との間に、明瞭な段が設けられた。

今回の発掘地域と第38次調査地域の両半とが、各面を築地SA2746によって割され、東西64m南北29mの矩形をしたブロツクが形成される。

築地SA2746は、西南、北面及び南面の西半部に建設したコ字形に構造があり、建物兩落溝、歩道をかねている。うち西北部分は片廊廊となる。

この築地にかこまれた一割への出入り口としては、南の中央に正門SB5340があり、西に門SB5450、北にSB4909がある。

正門SB5340は南縁を削平されているが、3間×2間で、梁間2.1m、桁行柱間は西脇柱間2.5mに対し、中央柱間3.9mと中央間がない。門の北側兩落溝SD5420(幅0.6m)は通常とことなり、門の基壇にそう部分が、門の方に向って入りこんでいる。西門SB5450は柱間2.8mの小規模なもので、礫石と唐戸敷を1石で兼ねたもの1対が残っていた。

南面の正門の内方に、埴輪鋪道SX5401が奥に向ってびていて。鋪道は平行した3条(各幅2m)からなり、門に近い個所で東西の鋪道により連結される。この鋪道の西側にも、似かよった鋪道SX5411が残存している。3条から成る鋪道SX5401の中央の策は、このブロツクの南北中軸線に対し対称の位置に配されており、全体として計画的な遺跡のあとが認められる。

鋪道SX5401の行き先に、埴輪基壇建物SB4880(南北13.5m、東西不明)があり、その西方、築地片廊廊ぞいに埴輪基壇南北棟11間×2間の建物SB4890(桁行2.5m、梁間2.5m)がある。いずれも、第38次調査で北部を検出していた建物であるが、今回の発掘で、その規模をほぼ知ることができた。

今回の発掘では、新たな埴輪基壇遺物の存在を確認できなかつたが、溝SD5355と東面築地、溝SD5335と西面築地の間にある空地には、痕跡を失つた建物があつた可能性を考へてもよからう。

建物以外の遺構としては中央建物泥4880の東方で井戸SE4866を発掘した。井戸枠は1辺4.5mの正方形井籠組15段分、深さ1.9mが残存していた。井戸の周囲には玉石を方形に敷きつめ、東側に玉石と埠を用いて長方形の浅い場のような設備をつくり、埠水ニ東面築地の内側を走る玉石樋

第SDあたりに算いでいる。

C期 が这次発掘調査報告にE期とした時期に合致する。この時期に属すると確認できる遺構はきわめて少い。

塗地SA2706はすでに廃絶し、玉石積清SD4850も埋め立てられている。東側にはSA2706のあとに塗地5392がつくられるが、それがこの地域を一周していたかどうかはわからない。

確認できた建物は小規模な柱立柱建物SB5395、5396の2棟にすぎない。そのほかには構SA5345、5350および小柱穴群があるのみである。

出土遺物には多量の瓦、磚、土器がある。

軒瓦は6135、6688型式が大多数を占める。磚は長方形、正方形の2種があり、「私事」、「公事」の捺刻あるもの、綠釉を施したものもある。なおC期の土塙から風字硯が、井戸から木製品（下駄、櫛、曲物）、隨手水甕、銅鏡が出土した。

#### IV 第41次調査

第41次発掘調査は、第1次内裏・朝堂院桂室地域の東部、第2次発掘調査地域の南に接する40アールの地域でおこなった。さきに「平城宮発掘調査報告書」では水田区画にのこる地割から朱雀門正面の中央に第1次内裏・朝堂院があり、のちに東の中土生門内方の第2次内裏・朝堂院に移ったと想定した。この想定では当発掘地域は、大極殿回廊と朝堂院回廊との接合部にあたるところである。宮造以前のこの地域は、東南方向にさがる低湿地らしく、地山には荷積土風の黒色土が広がっている。この低湿地を埋めて、厚いところで1mほどの整地盛土をおこなっている。

検出した遺構は想定した大極殿回廊の東南部にほぼあたる位置にあるL字形の塗地回廊と、朝堂院回廊位置でその東南隅にとりく形に検出した塗地がおもなもので、この地域全体の兼を限る位置に南北の溝があつた。

塗地回廊は幅約5mの基壇をもつていて、基壇は中央部約2mを残して

両側を盛りこんで基壇土を盛り上げている。基壇の両側には矢張りの溝を検出した。この基壇はのちに拡幅されて、慣なされのものに改められている。この拡幅されたときの基壇にともなうものとして、旅固石の残る礎石痕跡6個所と雨落溝を検出した。礎石痕跡によると柱間は桁行15尺、梁行25尺と復元できる。深行柱間が大きいから中央に幅5尺内外の棗地があつたと考えている。拡幅した東面棗地回廊の東半には南北の柱間15尺の掘立柱列がある。これは後述する暗渠の改修工事との関係からみておそらく、さうにおくれた時期に東面回廊の東半のみを改修したものと考えている。この回廊の東南隅では雨落水を処理するための溝が敷設にわたつて修復され、複雑な状態で検出された。まず基壇拡幅後南に木樋暗渠(エ)とその延長部の開渠(ミ)が設けられた。ついで東南入隅から東へ木樋暗渠(ヲ)が埋設された。この暗渠は棗地回廊東側通りの掘立柱列の廃絶後に作られていた。この暗渠(ヲ)が廃絶した後その北に木樋暗渠(イ)と開渠(ケ)が設けられた。これらの溝はすべて東の南北溝に流れこんでいる。なお東面棗地回廊上と両側の雨落溝下には南北小柱穴列6列があつた。遺留時の足湯穴かとおもわれる。

東面棗地回廊の東約8m、発掘区の中央付近に南北方向の溝がある。この溝は整地層上から掘られており、幅2m～3m、深さ1mほどで、乗中から「和銅」の年号をもつ木簡削屑が瓦などとともに出土している。

この溝の埋設土上で棗地回廊東南隅にとりつく棗地を検出した。棗地は削平されているが、残存部から推定すると基底幅5mほどで東へ11m、西へ9m、高さ2mを有する。この棗地の東側で凝灰岩底石痕跡のある雨落溝が残っていた。この棗地は南北方向の溝の埋設土との関係からその棗地は棗地回廊の遺留よりおくれている。

東限にある南北溝は幅2m～3m、深さ1.5mほどで、南端近くではこの溝にかかる橋を検出した。この溝の埋設によって東半を破壊された土塙から室毫元年の年号をもつ木簡断片が出土しており、南北溝設置の上限が推定できる。

この南北溝の東では小柱穴からなる掘立柱建物6棟と東からこの溝に

流入する次山溝又条。ならびにその両肩にある振立柱柵を検出した。発掘区の東南隅部分にはこの又条の東西溝と築地回廊からくる溝(又)および東西側振立柱建物を埋没する状況で別に盛土整地がなされていた。

築地回廊・塗地は平安時代には削平されており、両側に盛土が散乱している。東限の南北溝はこの段まで存続している。この西には塗/れ跡などの跡がある。

遺物には木簡・瓦・土器・木製品などがある。出土遺構との関連で注意すべきものをあげよう。東限の南北溝と溝(又)との合流点からは、中衛府兵衛府関係や統日本紀の記載と内容の一一致するもの。神護景雲3年の年記をもつものなどの木簡が出土している。また、開渠(又)の堆積土中から和銅闕环23枚が出土し、施渠(又)の木柵埋設土中からは蘇原富雄出土瓦と同瓦の出土が顕著であり、開渠(又)を埋没した土からは第2次朝聖院所用の6225・6663が多く出土した。中央の南北方向の溝からは先に述べた木簡と6222-A・6308・6664-Cの新瓦が出土している。

続延長90cmに及ぶ木柵はすべて柱の軸用材などで、柱の旧仕口に埋木して用いている。木柵暗渠(又)の外は全て矩形断面としてくりぬき桟を差して蓋を設けている。他に南北溝から飾鶴や円窓が出土している。

今回の調査について、北接する第2次調査では遺構の保存状況が悪かつたため不明確であつた築地回廊の存在が確認できた。この築地回廊はさらに北にのびるらしく、かつて6AB0区の第2・4・7次調査で検出した石敷溝SD130はこの築地回廊の北面廊の南隣堵溝であり、6AB0区東南隅にあつた門SB269は東面築地回廊の東側柱通りに位置する振立柱列の北端にあたるものと推定できる。これによつて築地回廊にかかる一郭は、おそらくこれまでの大膳藏推定地の南洋にまでおよんでいたことになる。

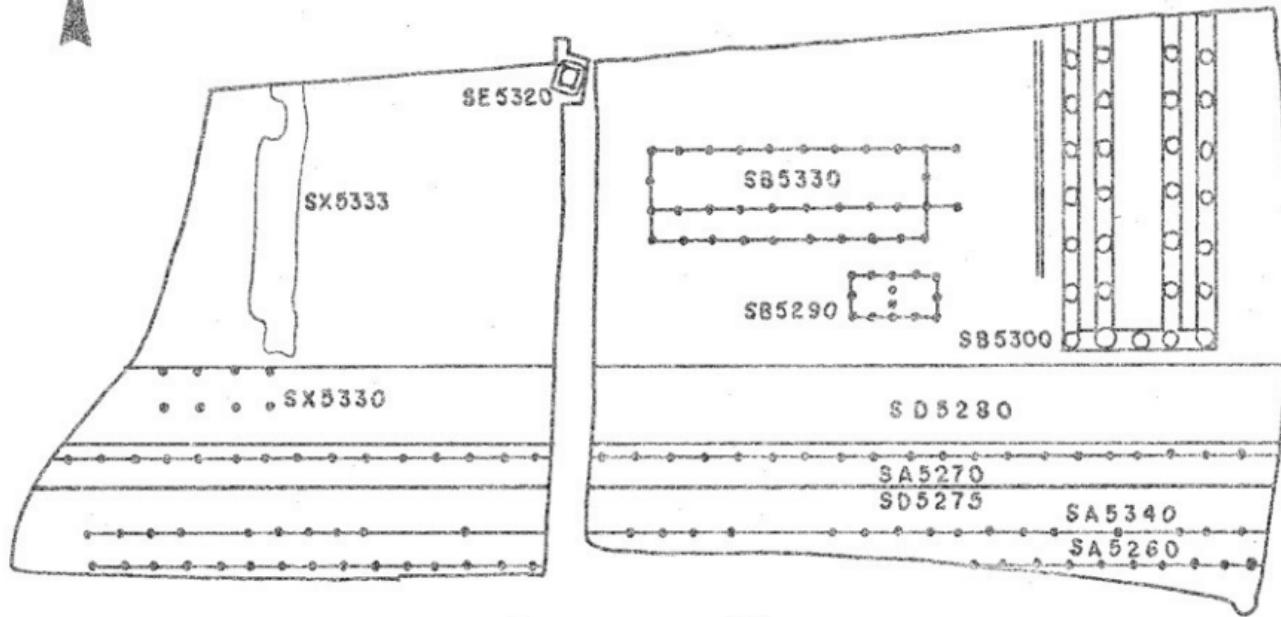
なお、この調査は継続中であり、この報告は中間報告であつて、最終的な結論は調査完了をまたねばならない。

最後に出土木簡中おもなものをあげておく。

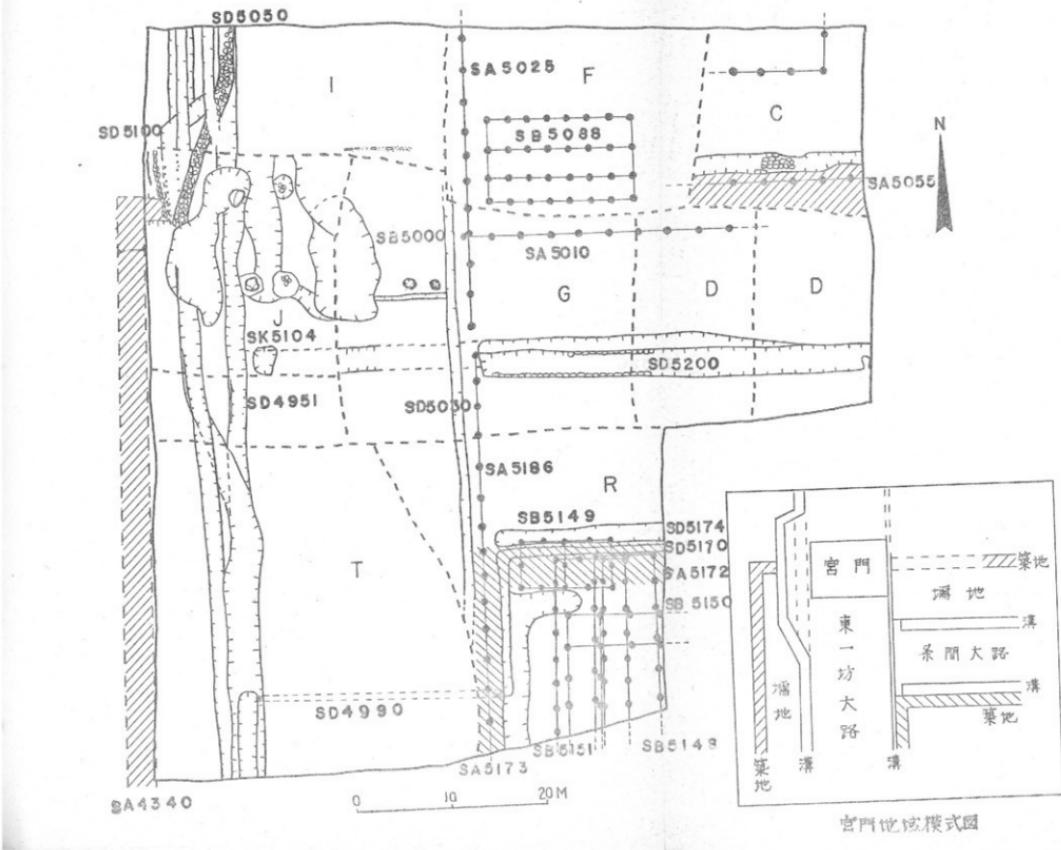
- (1) [擴大角音令]  
 「式部太二」 伊勢守伊勢守毛 逢(口)而歌節川守□  
 内音前音口聲万昌 美野守石上鬼□ 司乃守弓箭秋万昌  
 (伊<sup>ア</sup>) (美<sup>ミ</sup>) (司<sup>シ</sup>) (弓<sup>キ</sup>) (秋<sup>カ</sup>) □  
 步音三二 勇(口)外(口) 下氣(口)外(口)  
 尊(口)正(口) □
- (2) (前王) (伊<sup>ア</sup>後<sup>ア</sup>)  
 「下音介音口□」 □□ 守田文思万昌  
 能(空)(口)左馬司國年□口正  
 (守<sup>シ</sup>田<sup>タニ</sup>文<sup>ムニ</sup>思<sup>シ</sup>万<sup>カ</sup>昌<sup>カ</sup>) (左<sup>シ</sup>馬<sup>マ</sup>司<sup>シ</sup>國<sup>クニ</sup>年<sup>カ</sup>正<sup>カ</sup>)  
 夏外介口□ □ 右衛士督後泉  
 (守<sup>シ</sup>外<sup>ハナ</sup>介<sup>ハナ</sup>) (右<sup>シ</sup>衛<sup>エイ</sup>士<sup>ジ</sup>督<sup>シ</sup>後<sup>シ</sup>泉<sup>カ</sup>)
- (3) 「...衛府移中衛府 一音正八位下□□」 □  
 「...□□故移」 □
- (4) (分) (合<sup>ア</sup>)  
 「...□衛府移中衛口...」 □
- 「請輶參拾了 右為付節馬并夜行馬所請」 □  
 「如付 神護景雲三年四月十七日番長非淨癡」 □
- (5) (清<sup>ア</sup>)  
 「造花折 口口人 口飯多斗波和」 □  
 「六月六日雀部石麻呂」 □
- (6) 「...請食 石寸處万昌 作日朝夕添」 □  
 「四月廿四口口口東万昌口」 □
- (7) 「燕炮垂龍々對也口」 □
- (8) 「薄輿卅七斤五磅」 □
- (9) 「燕甲蟲爻作胞一擣」 □
- (10) 「雁魚焚割一籠」 □

N

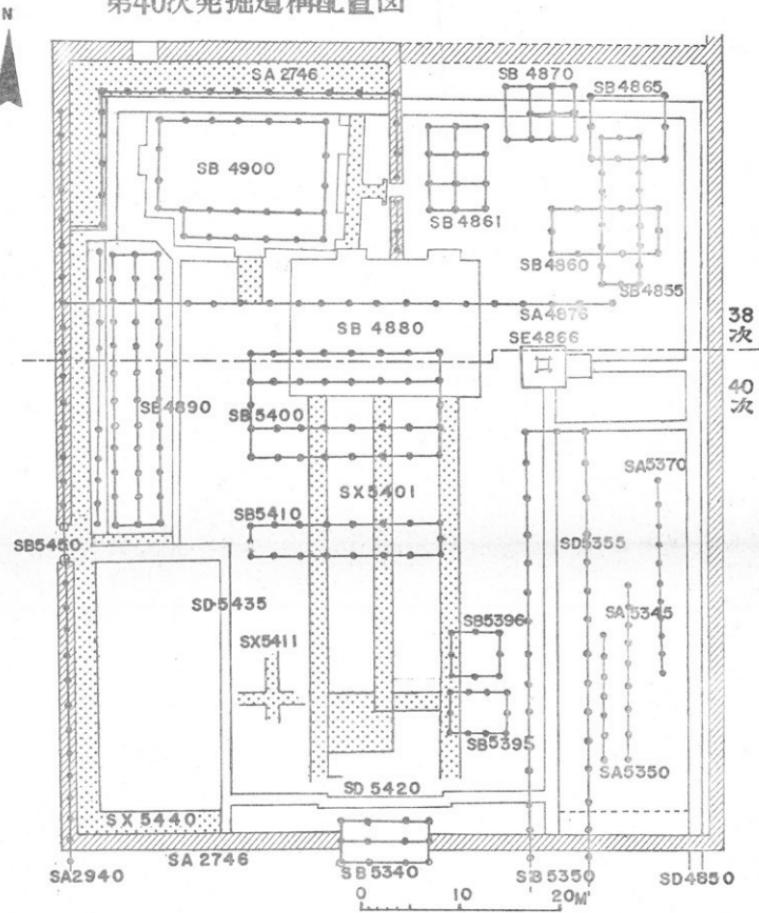
# 第37次発掘遺構略図



### 第39次発掘遺構配置図



第40次発掘遺構配置図



## 第41次発掘遺構配置図

N

